7 分割後期・二次 国 語

国 語

注 意

1 問題は 1 から 5 までで、12ページにわたって印刷してあります。
2 検査時間は**五〇**分で、終わりは**午前九時五〇**分です。
3 声を出して読んではいけません。
4 答えは全て解答用紙に**HB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）**を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
5 答えは**特別の指示**のあるもののほかは、各問の**ア・イ・ウ・エ**のうちから、最も適切なものをそれぞれ**一つずつ**選んで、**その記号の◯の中を正確に塗りつぶしなさい。**
6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄から**はみ出さないように書きなさい。**
7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、**その数字の◯の中を正確に塗りつぶしなさい。**
9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1 次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 皆で話し合って解決方法を探る。
(2) 昼休みの校庭に児童の弾んだ声が響く。
(3) 運動後に冷たい麦茶を飲んでのどを潤す。
(4) 豊かな自然の恩恵に感謝しながら暮らす。
(5) 地域の催し物の手伝いに友達を勧誘する。

2 次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 花壇にウえたひまわりが花を咲かせる。
(2) しらかばのジュヒを編んでかごを作る。
(3) 生き物のホウコである里山を大切にする。
(4) 試合のはじめに向かい合ってレイをする。
(5) 夏休みに旅先の友人から絵葉書がトドく。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに【注】がある。）

漫画家を目指している高校生の「私」（舞沢雛）は、同じく漫画家を目指している同級生の遠野のアドバイスにより、ある月刊誌が主催している賞に自分の漫画を応募した。その一方で、遠野と二人で新たな漫画を合作していた。

「雛ちゃーん、電話！」

帰宅後、自室で漫画を描いていると母が階下から私を呼んだ。固定電話に誰かがかけてきたようだ。一階へ下りて受話器を受け取る。

「なんか、なんとかのなんとかさんって人から。」

「それじゃあ全然分からないんだけど。」

「だぁって聞き取りづらかったんだもん！」

あとはよろしくー、と母が去っていく。この電話番号にかけてくるのは、基本的に学校関係の人しかいない。でもそれなら母も分かるはずなのだが、と不審に思いながら受話器を耳に当てる。

「はい、もしもし。お電話代わりました。」

「舞沢雛様ですか。突然のお電話申し訳ございません。私、『コミックエンタ』の編集をしております宮崎と申しますが。」

(1)その名前を聞いた瞬間、私だけ時間が停止した。体は硬直し、息は止まり、思考が寸断される。それでも相手の女はまだ話を続けようとしてくる。

「おめでとうございます。舞沢さんの『鏡を割れ』が最優秀新人賞を受賞しました。私も大変面白く読ませていただきました。」

最優秀新人賞。つまり、幾多ある漫画の中で、私の描いたものが一番優れていると判断されたということだ。状況は理解できたが、感情が追い付かない。

「ありがとう、ございます。」
掠れた声が出た。何度も頭の中で繰り返していたシチュエーションだった。なのに実際その場に立たされると、何と言っていいか分からなくなる。
「つきましては『鏡を割れ』を二月号の冊子に掲載させていただきたいと思っております。それでこちらはゆくゆくというお話なのですが、舞沢さんに連載をお願いしたく考えておりまして。」
「連載……。」
「はい。詳細はメールでお送りいたしますが、考えていただけますと幸いです。」
その後も宮崎と名乗る編集者は淡々と事務的用件を伝え、未だに事態が呑み込めていない私を置き去りにしたまま、電話は切れた。(2)
しばらくして、じわじわと喜びが這い上がってくる。
やった。やった。ついに。ついにやったんだ。私は、私は、漫画家になれた。なれたんだ。
廊下を駆けリビングのドアを開ける。母がソファに腰掛けながらドラマの再放送を見ていた。
「ねえ、お母さん、お母さん！　私、賞取ったの！　漫画家になれるんだよ！」
しかし母はテレビから目を離さず答える。
「いっつも言ってるでしょー、雛ちゃん。漫画ばっかり描いてちゃダメなんだからねー。」
その言葉で一気に熱が冷める。そうだ。この人はこういう人だった。嬉々として伝えた私が馬鹿みたいだ。無言でリビングを出て、自分の部屋に戻る。
どうせ誰からも祝福されたりなんかしない。*イラストサイトで報告したところでリアクションなど返ってこないだろう。
そのとき、ふと遠野の顔が浮かんだ。そうだ、遠野にはちゃんと言わなければ。
テーブルの上には、遠野に渡す用の書きかけの*ネーム。一番のクライマックスの部分。
遠野は、一体どんな反応をするんだろう。聞くのが怖かった。
翌日の放課後。私たちはいつものように図書室へ集まる。遠野だけがいつものように、作画の作業を進めている。(3)私は真っ白な紙に何も書けないまま、遠野の細い指を見つめている。
遠野と漫画を描くことは楽しかった。自分の描いたものを面白いと言ってもらえることも、向かい合ってどうでもいいような漫画の話をすることも。何より、自分を理解してもらえていることが、嬉しかった。
遠野との合作はかなり面白いものになるだろう。どこかの賞に出せばおそらくかなりいいところまで行く。二人で漫画家になれたらと語った絵空事がもし現実になるのなら、きっと私は一生退屈しない。
でも。だけど、それでも。
私は自分の絵で、自分の物語で、漫画を描きたい。認められたい。
そのためなら、目の前の理解者を切り捨てることなんて、容易なことだ。
「ねえ、遠野。」
「なにー？」遠野は漫画を描きながら答える。
「遠野に話があるんだよね。」
「なになに。どうしたんだい雛ちゃん。」

「私、新人賞受賞した。この前出したコミックエンタのやつ。連載もしないかって言われた。その話、受けようかと思ってる。」

(4)遠野のペンを持つ手がぴたりと止まる。勢い良く上げた顔には驚嘆が宿っていた。

きっと遠野はそれだけで私の言わんとしていることを理解できただろう。連載ともなれば他の漫画に割く時間はなくなる。遠野との漫画も描けなくなる。この作品を、どこかの新人賞に応募することだってできない。

彼女は驚嘆の後はどんな感情を宿すのだろう。一緒に漫画家になろうって約束したじゃない、と怒るだろうか。それとも、ここまで頑張ってきたのに、と悲しむだろうか。

見開いた目が細められ、遠野に満面の笑みが浮かぶ。

「えぇー！　すごい！　すごいよ雛ちゃん！　おめでとうー！」

遠野が私の手を取ってぶんぶんと振る。大袈裟なくらいの喜びようだ。

「ありがとう。漫画、完成させられなくてごめん。」

「全然いいよー、仕方ないよ！　えーすごいすごい、本当におめでとう！」

いつも嘘を言わない遠野だからこそ、その祝福に偽りのないことがありありと分かった。遠野の手が温かい。嫉妬や軽蔑や、冷たい感情が一切感じられない温かな手。

彼女はまるで自分のことのように今後のことを語る。学校行きながら連載なんてすっごく大変だよね。今後アシスタントとかついたりするのかな。今からサインの練習しておかなきゃだね！

(5)私は黙ったまま、その様子をただ見つめていた。

机の上には、描きかけの漫画が置かれている。美しく繊細な、妥協のない完璧な絵だった。

（君嶋彼方「春のほとりで」による）

〔注〕イラストサイト――インターネット上でイラストや漫画を投稿する共有サイトのこと。

ネーム――漫画の下書きや設計図のこと。

〔問1〕(1)その名前を聞いた瞬間、私だけ時間が停止した。体は硬直し、息は止まり、思考が寸断される。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 面識のない編集者から急な判断を迫られて緊張している「私」の様子を、内面の変化を表す言葉を繰り返し用いて表現している。

イ 身に覚えのない電話がかかってきて恐怖を感じている「私」の様子を、時間の流れに沿った情景の描写を用いて表現している。

ウ 新人賞を受賞したことについて知らされて気が動転している「私」の様子を、複数の擬態語を用いて表現している。

エ 漫画を応募した出版社から連絡があって驚いている「私」の様子を、たとえと連続した短い言葉を用いて表現している。

〔問2〕(2)しばらくして、じわじわと喜びが這い上がってくる。とあるが、このときの「私」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 編集者が一方的に話し続けて状況すら理解できなかった電話を終えて、困難を乗り越えた達成感を少しずつ味わっている気持ち。

イ 編集者との電話によるやりとりが終わり、漫画家になるという自分の夢が実現したことへの嬉しさを実感しはじめている気持ち。

ウ 作品の面白かった点を中心に一生懸命説明してくれた編集者の話を思い返し、プロの漫画家としての仕事に満足しつつある気持ち。

エ 自分の漫画づくりを心から応援してくれていた母の存在を思い出し、漫画家として働いて親孝行できる幸せをかみしめている気持ち。

〔問3〕(3)私は真っ白な紙に何も書けないまま、遠野の細い指を見つめている。とあるが、「私」が「真っ白な紙に何も書けないまま、遠野の細い指を見つめていた」たわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 遠野と合作している漫画のアイデアが思い浮かばず、遠野が作画の作業をしている姿を見ながらヒントを得ようとしているから。

イ 新人賞の受賞について遠野よりも先に母へ伝えてしまったことを後ろめたく思い、どのように謝罪すればよいか考えていたから。

ウ このまま遠野と二人で漫画を描き続けることに大きく影響する新人賞の受賞について、遠野に言い出す決心がつかずにいるから。

エ 新人賞の受賞を伝えても誰からも祝福されることがなく、今後も遠野と漫画の合作を続けていくことに自信を失ったから。

〔問4〕(4)遠野のペンを持つ手がぴたりと止まる。とあるが、この表現から読み取れる遠野の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「私」から聞いた話の内容に衝撃を受け、それまで進めていた作画の作業を中断するほど驚いている様子。

イ 一緒に漫画家になろうと約束した「私」から一方的に約束を破られた経緯を知り、怒りに打ち震えている様子。

ウ 長い時間をかけて二人で合作してきた漫画に価値がないと考えている「私」の本心を悟り、深く悲しんでいる様子。

エ いつになく真剣に作業を進めていた中で「私」に話しかけられて混乱し、何を描けばよいか必死に思い出している様子。

〔問5〕(5)私は黙ったまま、その様子をただ見つめていた。とあるが、この表現から読み取れる「私」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア これからも自分のアシスタントとして一緒に漫画を作っていきたいという遠野の申し出を受け、断ることができずに困っている様子。

イ 受賞の事実を聞いた瞬間に嫉妬や軽蔑の表情を浮かべた遠野の姿を見て、漫画の合作ができなくなることを残念に思っている様子。

ウ 学校生活と漫画の連載が両立できないことを遠野に心配されて、漫画家としてどのように進んでいけばよいか思案している様子。

エ 受賞の事実を心から喜んでいる遠野の姿と、個人の夢の実現を優先しようとしている自分を対比しながらぼう然としている様子。

4　次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「現われる」というのは、何らかの経験にとって現われるということだ。経験は、それぞれの経験主体が自分で確認したり辿り直したりできる。つまり、何かが現われており、それが経験されていれば、それについて反省的に（振り返って）吟味する可能性が開けていることになる。〈経験〉という通路を介して、われわれはあらゆる現象にアプローチできるのである。（第一段）

現象のなかには、何らかの〈現象するもの〉が現われている。何かがその〈何か〉として現われるためには、様々な条件が必要になる。たとえば、レモンという物体が現われるためには、黄色い色、つやつやした質感、独特の形などが経験されなければならないし、鼻に近づけて匂いを嗅いでみれば、特徴的な香りから、それが偽物のレモンでないことがわかる。カットして舐めてみれば、酸っぱさを感じる。レモンという対象は、こうした様々な経験を通してはじめて「レモン」として現われている。逆に、いま挙げた様々な経験は、〈レモンの現われ〉として纏まり、統一的な連関を形づくる。経験のなかには様々な対象が現われているが、それらはいずれもこうした統一的な連関に対応している。個々の経験は、互いに噛み合う仕方で纏まりを成して一つの対象を指し示し、対象は更なる多様な経験の可能性を指し示す。経験のなかに現われてくるこうした対象との関係性は、志向性と呼ばれる。（第二段）

現われとその経験の多様性のなかに、対象とその統一的連関が形成され、浮かび上がってくることを、現象学では構成と呼ぶ。「対象の構成」と言っても、心が対象を勝手にでっち上げるわけではない。現象学では、実在的な対象がある場合には、志向的対象はまさしく心を超えた実在的対象そのものであると考える。「実在的対象」という言葉が哲学的に何を意味するかはひとまず措くとして、日常的経験にとって〈ものそのもの〉として捉えられているものは、現象学にとって経験の対象であると同時に、「心の外」にある「超越的な」対象でもある。これが矛盾的に見えるのは、（一種の思考遊戯によって）われわれが具体的に行っている現実の経験から遊離してしまう場合のみである、と＊フッサールは強調する。(1)対象は内にあると同時に外にある。われわれの具体的経験は、「内と外」などという硬直した枠組みをとっくに乗り越えているのだ。（第三段）

経験と現われを通路として現象学が切り拓いた思考の空間は、いま述べたように、「心理的」と呼ばれる考察とも「科学的・客観的・三人称的」と呼ばれる考察とも同一視できず、ある意味でその両方を含むような思考の空間だったと言えるだろう。こうした思考の空間の磁場に引き寄せられて、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、サルトル、レヴィナスといった後続の哲学者たちが、この思考空間を出発点としてそれぞれの思考を展開していったのである。（第四段）

志向性は対象そのものとの関わりであると述べた。志向的経験がなければ対象の現われもないと言えると同時に、対象がなければその対象の経験もないと言える。このことは、いわゆる「間主観的」な経験、すなわち複数の主体による経験において際立つ。私に〈ある〉と思えた対象であっても、他人に経験できないなら、それは真に実在するとは言えない（私の思い違いや錯覚、幻覚など）。対象そのものがなければ、私と他者がそれを共通に経験するということは起こりえない。と同時に、〈他人と共通に経験できる〉ということがなければ、ある対象が真に〈私の経

験を超えた同一の対象〉という意味を受けとることはない。(2)あるものをめぐって、私と他者が相互に関わり合い、指示し合い、話し合い、通じ合うなかで、そのものは、はじめて〈同じもの〉として確かめられ、際立ってくるのである。（第五段）

「スプーンを取って」と言われてスプーンを手渡す。このやりとりのなかで、スプーンは〈同じもの〉として同定され、同時に、間主観的なやりとりはスムーズに進行する。「スプーンを取って」と言われたのにフォークやナイフやどんぐりや下着などを渡し続けていたら、相互作用は混乱し、わけがわからなくなる。共同性も成り立たず、〈同じもの〉も成立しない。逆にいえば、〈同じもの〉の立ち現われと、「うまく行く」相互作用とは同時であり、同じ出来事の両面である。（第六段）

この〈同じもの〉は、究極的には〈一なる自然〉そのものである。〈同一の自然〉があり、そのなかにわれわれは自然の一部であるような身体をもつ。誰もが自然のなかに身体をもつので、われわれはお互いの姿が見えるし、声が聞こえる。身体を通して、われわれの経験、われわれの生は互いに絡み合う。自然が一つであるということが、この絡み合いをそもそも可能にしている。と同時に、多数の生の絡み合いのなかでこそ、自然の唯一性が一種の〈理念〉として際立ってくるのである（実際には、互いの生には、通じ合えない、理解し合えない部分も極めて多いのであるが）。（第七段）

さて、いま〈理念〉という言葉が出てきた。この〈理念〉こそ、多数の生が互いに絡み合い結び合うことができるための鍵である。（第八段）

経験の世界は、各々の経験主体にとって独特の彩りやまとまりを成している。他人の経験の世界は、直接に知ることはできない。そこでわれわれは言葉を代表とする広義の記号を使って、互いの意思を知り、互いの経験世界を通じ合わせている。なぜそんなことが可能なのだろうか。（第九段）

それは、記号が「理念的なもの」へとわれわれを関わらせることができるからだ。「理念的なもの」は、決して主観的な幻のようなものではなく、それ自体「明証的に」（それ自身を証拠として示す仕方で）経験されうるとフッサールは言う。「1」とか「一」とか「いち」「one」などは書かれた文字であり、*パースの三項図式で言えば「サイン」に当たる。これらは具体的な物理現象として世界のなかに現われる。他方、これらによって表されている数の1そのものは、見たり触ったりできる対象として世界のなかに現われるものではない。だが、そうであるからこそ、いつでもどこでも、綺麗な文字で書いても汚い文字で書いても、全く同じ内容を保持することができる。こういった性格が「理念的」と呼ばれる。（第十段）

理念的なものは、何らかの物理的な担い手（サインとしての記号）がなければ現われることはできないが、特定の担い手に依存するわけではない。私が発話しても、他人が発話しても、1は1である。つねに物理的な担い手に「基づけられて」いるのに、ある意味でそれに依存しないあり方をしているのが理念的なものである。だからこそ、それは私にとっても他人にとっても共通の〈同じもの〉であることができる。言葉や数学的記号などを用いることによって、われわれは各自の経験世界の独自性に依存しないレベルで、互いの生を関わり合わせることができるのである。（第十一段）

注意してほしいのは、現象学は、各自の主観的生から切り離されたも

のとしてプラトニック*な理念の世界がある、とは考えないという点である。理念は、個別の経験や現象には依存しないが、いかなる経験にも依存しないわけではない。つねに何らかの経験に依存しているが、必ずしもその経験に依存しなくてもよかったというにすぎない。私の経験と他人の経験が互いに関わり合い、記号を介して互いに深く交差し合う具体的なプロセスの只中（ただなか）にのみ、理念的なものは現われうる。交差し合う生のなかに現われながら、その具体性や個別性には依存しない、というのが理念的なものの特性であり、言葉を含む記号現象一般の特徴なのである。記号現象とは、われわれの生がバラバラのものではなく、互いに交差し出会いうるものだということを、高度に純化された仕方でわれわれに示していると言ってもよいかもしれない。（第十二段）

(3) 記号を通じて、われわれは他人の経験を理解する。個々人が現実に経験することは異なるが、それらを相互に重ね合わせるある種の「変換」が可能である。この変換可能性そのものに名前を付け、扱いやすくしたものが〈記号〉と呼ばれるものなのではないか。私の嗅ぐレモンの香りと、他人が嗅ぐ同じレモンの香りは、おそらく異なる。しかし、それらを相互に変換する操作が可能である。この変換可能性そのものに名前をつけたのが「レモン」という語なのではないか。記号に対応する実体的なものはなく、記号はつねに、諸経験の間の無数の変換を代表しているのではないか。記号についてのこのような問いを現象学的に追究するのは、興味深い論題の一つであると言えるだろう。（第十三段）

（田口茂「現象学――現われと経験に基づく思考」（一部改変）による）

〔注〕 フッサール――オーストリアの哲学者。現象学を提唱した。

パースの三項図式――アメリカの哲学者パースによる、記号を、記号自体、対象、解釈項の三項関係から捉えた考え。

プラトニック――純粋。

〔問1〕 (1) 対象は内にあると同時に外にある。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 対象は、経験から離れて心の内にあると同時に、心の外で統一的な連関を形づくっているということ。

イ 対象は、個々の経験のまとまりとして心の内にあると同時に、実在的な対象として心の外にもあるということ。

ウ 対象は、「心理的」考察か「科学的・客観的・三人称的」考察かという枠組みで、一方の視点から思考されているということ。

エ 対象は、実在的な対象であると同時に、普段経験することができない超越的な対象でもあるということ。

〔問2〕(2)あるものをめぐって、私と他者が相互に関わり合い、指示し合い、話し合い、通じ合うなかで、そのものは、はじめて〈同じもの〉として確かめられ、際立ってくるのである。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 他者とやりとりをすることによって、私と他者それぞれの経験に基づく対象が、個別の経験を超えた同一の対象となるということ。

イ 他者とやりとりをすることによって、心が勝手に作り上げた対象が、物体としての特徴を示して真に実在するようになるということ。

ウ 他者とやりとりをすることによって、他人には経験できていない対象が、私には〈ある〉と思えるものだと確信できるということ。

エ 他者とやりとりをすることによって、個別の経験に基づく対象が、私と他者それぞれの異なる経験として深まっていくということ。

〔問3〕この文章の構成における第九段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた考え方について、根拠となる具体的な例を示し、文章後半の内容に向けて論を補足している。

イ それまでに述べてきた考え方に対して、批判的な立場からの意見を示し、文章後半の主張へと論を転換させている。

ウ それまでに述べてきた考え方に基づいて、問題点を列挙することで、文章後半の主張の逆転へと論を進めている。

エ それまでに述べてきた考え方を受けて、新たに問題を提起し、文章後半の結論へとつなげている。

〔問4〕(3)記号を通じて、われわれは他人の経験を理解する。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 具体性や個別性に依存する記号を用いることで、各自の経験の違いが明確になり、それぞれの生き方を比較できると考えているから。

イ 理念の世界に全く依存しない記号を用いることで、他人の具体的な経験を深く知り、興味をもつことができると考えているから。

ウ 個別の経験に依存しない記号を用いることで、それぞれの経験を変換し、互いに関わり合うことができると考えているから。

エ 全ての人の経験が一つにまとまっている記号を用いることで、他人の無数の経験について、高度に理解できると考えているから。

〔問5〕国語の授業でこの文章を読んだ後、「言葉を通じた他者とのやりとり」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「なども、それぞれ字数に数えよ。

5 次の**A**は、与謝蕪村の句に関する座談会の一部であり、**B**は、**A**で述べられている句について書かれた文章である。また、**C**は、**A**で述べられている句の原文とその解釈である。これらの文章や句を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

藤田　あれこれ迷うときりがないので、ふと心に浮かんだ句を申し上げたいと思います。有名な句ですが、「(1)凡巾きのふの空のありどころ」を選びました。好きな句は他にもありますが、これをあげた理由はこんなことです。一般に俳句は写生が要だと言われます。それは正岡子規が言い出しただけでなくて、江戸時代からそういう面がありました。とくに俳句では、和歌と異なる特徴として写生性があったと言えます。

ところが蕪村の場合は、そうではない面がある。別のことばで言うと、写生は空間性を表しますが、時間性を見事に詠み込んだ句がかなり目につく。「凡巾」はたこ上げのことで、『蕪村句集』の次句を見ますと、「やぶいりのまたいで過ぎぬ凡巾の糸」と続けて出てきます。

イ　藪入りで故郷に帰って子供たちがたこを上げている。そのたこの糸をまたいだ瞬間に、別世界になる。別世界というのは自分の幼少期です。一気に時間をかけ上る心境になれる。この句も時間の一気の跳躍を詠じて、すごい句だと思います。

「きのふの空のありどころ」で、たこが空に上がっているのを見ながら、いつしか、きのう、さらにその前、一年前、十年前、三十年前というふうに時間をどんどん遡っていく。ほかにもそういう時間性を詠んだ俳句がたくさんある。数句のみ申しますと、「春雨や暮れなむとしてけふもあり」、「遅き日のつもりて遠き昔かな」などです。考えてみれば、俳句ではありませんが、「春風馬堤曲」も時間性に富んだ作品だと評することができます。

俳句が本来もっている写生性、すなわち空間を描き出すことを最大の特徴とするなか、逆らったというわけではないが、あえて詠みにくい時間性を見事に詠み込む。そのことによって読者の気持ちを広げまた深める。そういう点でこの一句をあげたいと思いました。

あげていただいた句のほかに、迷ったようなことでも結構ですが、いかがでしょうか。

深沢　藤田さんのおっしゃった時間性ということでいうと、私がもう一つ迷ったのは、「花の香や嵯峨の燈火きゆる時」です。時間を昔に遡るのではなくて、この瞬間という時間をきれいに切りとってくるのも、蕪村の特徴かと思うのです。「雛見世の灯を引くころや春の雨」とか、すごく繊細なところがありますね。どうしても私は趣向を中心に見てしまうのですが、頭で計算しただけではなくて、これは詩なんだなとすごく感じます。

ウ

藤田　先ほどおっしゃった、天空を見上げるような視点は、まさにそのとおりです。それと同時に、蕪村が江戸中期に生きながら、たとえば「鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな」のように、平安とか鎌倉の昔にスッと心を移せる、平安末期の乱世を思わせる世の中を詠み込んでしまう、あの発想法はどこから出てくるのか。時間ばかりか空間をも超越する想像力、空想力が蕪村にありますね。

深沢　五七五しかないのに物語ができてしまう。すごいですよね。

藤田　なぜでしょうか。

深沢　芭蕉は連句が得意だったけれども、蕪村は発句だけで連句をつくっているような、ギュッと詰まっている感じがして。

有坂　蕪村の句は、読んだだけで情景が目の前に広がります。エ

藤田　一瞬にして情景が浮かびます。

有坂　*さきほど申し上げた「夏河を越すうれしさよ手に草履」にしても、それだけでパッと夏がきて、川のせせらぎの音も聞こえてきそうな気がします。

藤田　自分が渡っている、まさにそのときの水の触感とかね。

有坂　すぐにその時の心情になれるというのが、印象として残っていますね。

(2)
藤田　もう一つ、いつも不思議なのは、目の前の世界を飛び越えるような発想力や視点をもっていながら、つくられた場が、自宅の狭い部屋か句会という場であることです。

深沢　*兼題のものが多いですね。

藤田　題を目の前にしてつくっている。

岡田　藤田さんの御本にも書かれているのですが、まさに「翔けめぐる創意」といいますか、イメージが頭の中をかけめぐっているような句があります。

（岡田秀之、深沢了子、有坂道子、藤田真一「蕪村余響三〇〇年」による）

B

(3)
凡巾きのふの空の有り所

春の空に今日も凧が揚がっている。空に貼り付いているかのように、じっとしたままの凧を眺めていると、凧のまわりの空は今日の空ではなく、過ぎ去った日の空ではないかという気がしてくる。

「凡巾」は関東では「たこ」（『*物類称呼』）といった。春の季語である。「有り所」は、その物が存在する場所。蕪村には「古里や月はむかしのありどころ」という句もある。「きのふの空」の「きのふ」は、今日の一日前を限定的に指しているのではなく、凧揚げに興じた遠い少年の日々につながる、過ぎ去った日々を広く指している。*嘱目の風景を、郷愁的な時間へと繋げた作であるが、中村草田男は『蕪村集』において、「『時間』をその連続性においてとらえた蕪村独特の句の一つである」とし、この句には「瞬間がすなわち永遠である」というような「一種の冥想味」があり、「この句からは懐しさと同時に一種のもの悲しい孤独感のようなもの」が感じられると評している。近代になって蕪村を再発見した正岡子規もまた早く、「蕪村の特色を最も善く現はしてゐる」（『蕪村句集講義』）句であると評価した。

(4)
懐旧
遅き日のつもりて遠きむかし哉

暮れなずむ長い春の一日、つれづれのうちに昔のことが思い出される。過去の或る一日も今日のように過ぎ、同じように過ぎ去っていったそのような日々が積もり積もって、今から振り返れば、いつしか遠い昔になってしまったのだ。

「遅き日」は、暮れるのが遅い春の日で、春の季語。過去の一日一日はその時の今日であったということ、そして今日という日もその過去の日々と同じ繰り返しの一日だということ、この昔と今についての二通りの相関的な把握が、「つもりて遠きむかし」という表現に渾成凝

縮されている。さらに言えば、それは未来の私が経験するであろう「遅き日」には、今日という日もまた「遠きむかし」に感じられるようになるのだという、予感の表現にもなっている。「遅き日」という今を中心に、過去と未来に無限につながる時間を、その流れのままに表現した蕪村の手際は、まことに鮮やかである。『郷愁の詩人与謝蕪村』の「春の部」の巻頭にこの句を据えた*萩原朔太郎は、「この句の詠嘆してゐるものは、時間の遠い彼岸に於ける、心の故郷に対する*追懐であり、春の長閑な日和の中で、夢見心地に聴く子守唄の思ひ出である」として、この句にも「郷愁」の主題を見出し、「特に彼の代表作」と高く評価した。

（揖斐高「蕪村」による）

C

春雨や暮なんとしてけふも有 **ア**

しとしとと小やみなく降り続ける春雨。暮れなずむ春の日もようやく暮れようとして、私は今日もしみじみとつれづれの情趣に浸っている。

花の香や嵯峨の燈火きゆる時 **イ**

夜桜見物の人も去って嵯峨の灯火が消えるころ、かすかな花の香が漂って来て、花の精に触れる思いがする。

雛見世の灯を引ころや春の雨

雛市の店をしまい、灯を消して寂しくなったころ、それまでは雛に遠慮をしていたかのようにしとしとと春雨が降ってきた。

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉 **ウ**

激しい野分のさなか、武者たちが五六騎、ただならぬ体で鳥羽殿へ馬を走らせる。

丹波の加悦といふ所にて

夏河を越すうれしさよ手に草履 **エ**

炎暑の中、水かさの減った夏の川を、手に草履をぶら提げ、冷たい水に足を浸して川越しする快さ。

（「蕪村全集　第一巻　発句」による）

〔注〕

藪入り――正月と盆に、奉公人が主人から休みをもらって実家などに帰ること。

春風馬堤曲――蕪村が作った詩の名前。

さきほど申し上げた――有坂さんが好きな句として話題にした。

兼題――句会などで、題をあらかじめ出しておいて句を作ること。

物類称呼――辞書の名称。一七七五年に発刊された。

嘱目――自然に目に触れたもの。

萩原朔太郎――一八八六年生まれの詩人。

追懐――昔のことを後から思い返すこと。

〔問1〕 **A**の中の――を付けた**ア**～**エ**の「に」のうち、他と意味・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

〔問2〕 **A**における(1)「凡巾(いかのぼり)きのふの空のありどころ」の句についての説明と、**B**における(3)「凡巾(いかのぼり)きのふの空の有り所」の句についての説明に共通するものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 現存しない物を描きながらも、目の前に存在しているかのように思わせる、空想性に富んだ句である。

イ 常に変化し続ける物を描くことで、永遠に続くものはないと気付かせる、悲しさを表現した句である。

ウ 変化しない物をあえて描くことで、一瞬一瞬を大切にしようと感じさせる、繊細な句である。

エ 目の前の景色を描きながらも、過ぎ去った日々を想起させる、時間性を詠み込んだ句である。

〔問3〕 (2)**藤田**さんの発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 俳句は写生が要だとする蕪村の考え方について、矛盾するような事例を示すことで、発言を引き出そうとしている。

イ 読者の想像が広がる句を蕪村が作っていたことについて、句を作る場の意外性を示すことで、話題を深めようとしている。

ウ 蕪村が自宅でのみ作句したことについて、写生性を生かしていない事実を示すことで、問題点を指摘しようとしている。

エ 蕪村は連句が得意だったことについて、具体的な事例を示すことで、話題を転換しようとしている。

〔問4〕 (4)遅き日のつもりて遠きむかし哉(かな)とあるが、「つもりて遠きむかし」について説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 過去のある一日がまるで今日のことのように思い出され、繰り返し回想するうちに今日もまた過去になっていくということ。

イ 過去を振り返らずに毎日新しい気持ちで過ごすことで、かけがえのない今日として日々を積み重ねていくことができるということ。

ウ 過去のある一日はその日にとっての今日であり、今日の連続によって生じる日々の蓄積がやがて遠い過去になるということ。

エ 過ぎ去った日々が詳しく思い返せないほど遠い記憶となったことで、改めて今日のことを考えることができるということ。

〔問5〕 **C**の中の――を付けた**ア**～**エ**のうち、現代仮名遣いで書いた場合と異なる書き表し方を含んでいるものを一つ選び、記号で答えよ。